

## 折衷土器の製作者：韓国靑島遺跡における弥生土器 と無文土器の折衷を事例として

中園， 聡  
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/1955677>

---

出版情報：史淵. 130, pp.1-29, 1993-03-25. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 折衷土器の製作者

—韓国勸島遺跡における弥生土器と無文土器の折衷を  
事例として—

中 園 聡

## I はじめに

従来の日本考古学のコンテキストでは、遠隔地で類似した遺物が発見された場合、説明要因として人の移動が想定されることが多く、同一型式の分布範囲が通婚圏などの実体的単位と結び付けられる傾向も強かった [cf. 都出, 1983; ほか多数]。その一方で、一部の見方としては、情報伝達システム communication system という包括的概念で把握しようとするむきがある [上野, 1980; 田中, 1982; 田中・松永, 1984; 山本, 1991; ほか]。なお、土器の類似度の解釈にインターアクションモデル interaction model を導入したものとして羽生淳子のすぐれた研究があるが [羽生, 1986]、結論的には人の移動というモデルを支持してしまっている。

後者の潮流の中で、土器において、属性によって分布にずれがみられるという認識がえられるようになってきたことは近年の成果の1つである [田中・松永, *ibid.*; 深澤, 1986; 溝口, 1987]。型式や「様式」を最小単位として分析・記述を行ってきた諸研究に比べて、はるかに実態に即しており土器ひいては人工物のもつ考古学的意義を格段に引き上げるのに役立っている。このような研究によって、型式や「様式」を実体的な単位としているばかりではそのような現象を説明できないということが明らかになったといえる。しかしながら、そうした錯綜した属性変異によって示される地理的変異が、具体的にどのようなプロセスによって生み出されているかという問題に関しては、十分には追求さ

れていない状態である。

都出比呂志は、情報伝達システムというだけでは何も説明したことになるず、具体的な要因を追求すべきであるという意味の批判も行っている[都出,1989:344]。土器の諸属性の伝播は必ずしも人の移住や通婚に限られるものではなく複雑な過程があるということについてはもはや揺るぎようがないとしても、現象の背後にあるものを説明せよという主張は正論である。その意味では、情報伝達システム概念を用いた土器あるいは土器の諸属性の伝播に関する諸研究でさえ、いまのところ伝播の具体相を説明しそこなっているのが実状である。要素によって、導入する／しない、受容する／しない、ということがあるのはなぜなのだろうか?そこにどのような過程があるのであろうか?

そこで本論では、文化と行為者との関係についていくつかの概念を提示した上で、土器の「折衷」という現象に対して、土器製作者個人による折衷要素の意図的／非意図的選択という視点から考察するものである。

## II 無文土器と弥生土器

本論では、弥生時代前期後葉から中期後葉、すなわち板付Ⅱb式から須玖Ⅱ式古段階の北部九州における土器、およびそれに併行する朝鮮半島南部の後期無文土器を対象とし、ここでの分析では甕のみを用いることにする。

以下では北部九州系の弥生土器について、繁雑になるのを避けるためたんに「弥生土器」と呼ぶことが多いことを了承されたい。さて、弥生土器と無文土器はそれぞれ確固とした分布範囲をもち、朝鮮海峡を挟んで接している。両者は一見、無関係のようにみえるが、日本列島では北部九州を中心として無文土器がみられること、朝鮮半島南部には北部九州系の弥生土器が存在していることが、これまで指摘されてきた。もちろん、それらの量は微量であるが、なかには、たんなる土器自体の移動ではなく折衷土器も存在するなど、両者の関係に再考をせまる重要な問題もある。

近年では良好な遺跡の調査が進みつつあり、韓国三千浦市勒島遺跡 (Fig.1) では無文土器に混ざって弥生土器や弥生土器の要素をもつとみられるものが出

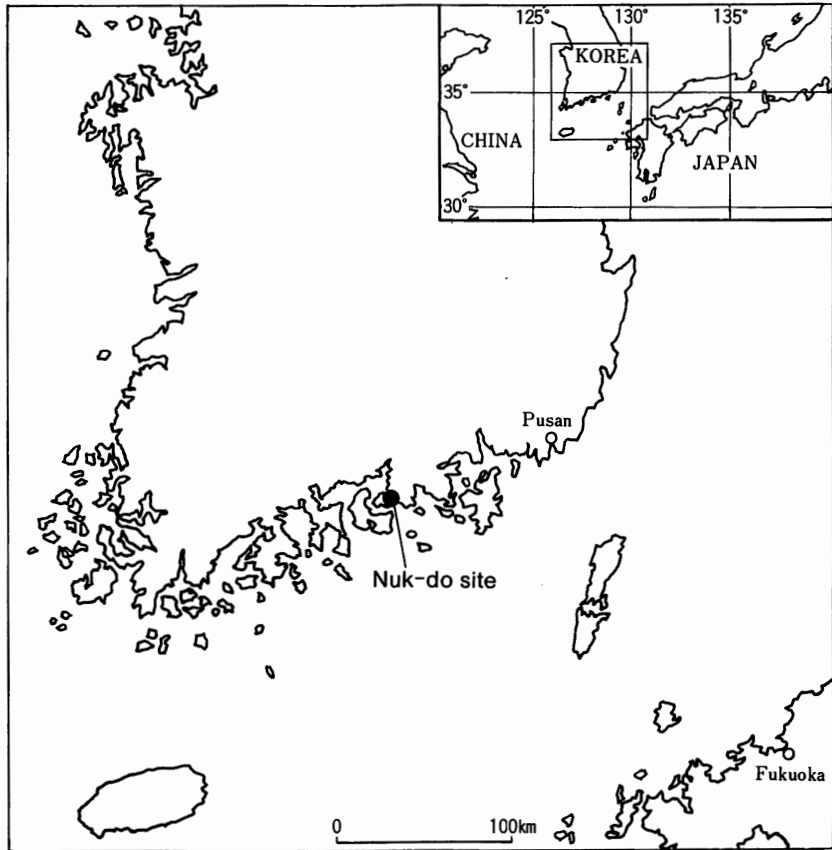


Fig. 1 Location of the site.

土していることは有名である [釜山大学校博物館, 1989]。釜山市萊城遺跡の調査でも弥生土器が多く出土している [宋・河, 1990]。一方、日本における無文土器は近年、福岡県小郡市三国丘陵 [中島, 1985; 片岡, 1988; ほか] や佐賀平野 [佐賀県教育委員会, 1973; 1977] など北部九州においてある程度まとまった資料が得られている。

このような現状は、弥生土器と無文土器との編年的な併行関係の解明や、文化的な接触のありさまについての記述を行うという点においては一定の役割を果たしている。しかし、東アジアの一角における地域間関係の記述というロー

カルな問題にとどめるべきものではなく、異文化間での接触現象という点を重視すれば考古学的に一般性をもった問題へと発展させることができると考える。具体的には、弥生土器と無文土器でそれぞれ安定した構造をもつようにみえるが、その構造を保たせているところの弥生文化における弥生土器製作者の認知構造と、無文土器文化における無文土器製作者の認知構造に接近することができるわけである。弥生土器と無文土器との間の相違点と共通点をふまえて、製作者たちが異なる土器様式に接して“折衷土器”を生み出すに際してどのように対処しているか、またそのような対処がどのような契機に基づくのかを鍵としてこの問題に立ち入りたい。

無文土器と弥生土器との併行関係については、福岡市諸岡遺跡や小郡市三国丘陵などの共伴例から推定されているが、無文土器の新しい時期についてはあまりよくわかっていなかった。福岡市那珂遺跡 [常松・古川, 1992] では須玖Ⅱ式古段階の甕と新しい段階の無文土器との共伴例が知られ、このように、併行関係がわかる事例が少しずつ増えている。こうした例をもとに、弥生土器と無文土器との併行関係について簡単な編年案を示しておく (Fig.2)。以下では便宜的に、板付Ⅱb式～前期末・城ノ越式と円形粘土帯をもつ無文土器を「ステージⅠ」、それに後続する段階の無文土器と須玖Ⅰ式～須玖Ⅱ式古段階とを「ステージⅡ」とする。「ステージⅠ」は資料的に十分ではないので、分析においては「ステージⅡ」について主に述べる。

分析にあたって、まず最初に行わなければならないことは、弥生土器と無文土器の差はどのようなものであるかを明らかにすることである。なぜなら、これまでいろいろな資料に対して、経験的に弥生土器的であるとか無文土器的であるとかの判断が行われてきたが、どういう点が弥生土器的でどういう点が無文土器的であるという基準が明確にされていないからである。そこで計測的項目、非計測的項目の両面から検討を試みる。また、可能なものについては多変量解析を用いた分析を行う。次にいわゆる折衷土器と考えられるものを取りあげ、その判別を行うとともにどのような部分において「折衷」が起きているかを明らかにし、「折衷」のモデル化を行う。

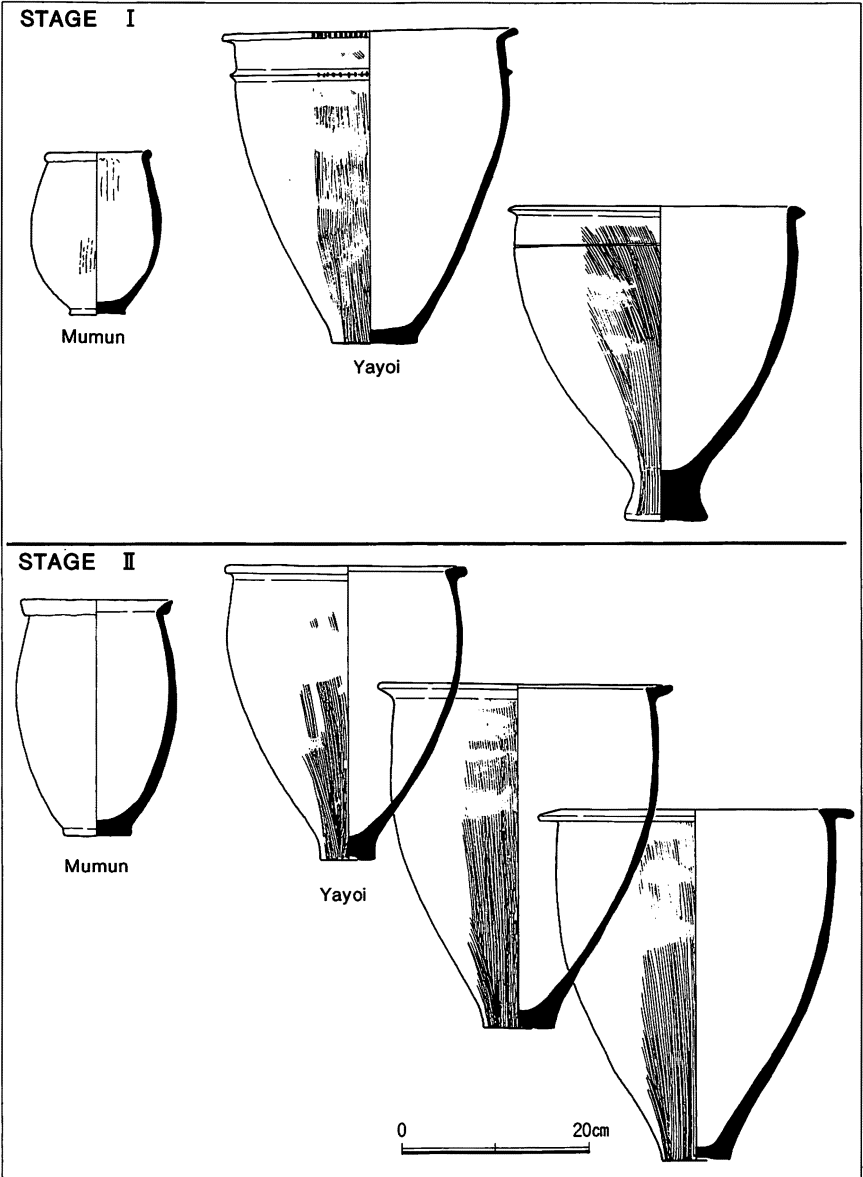
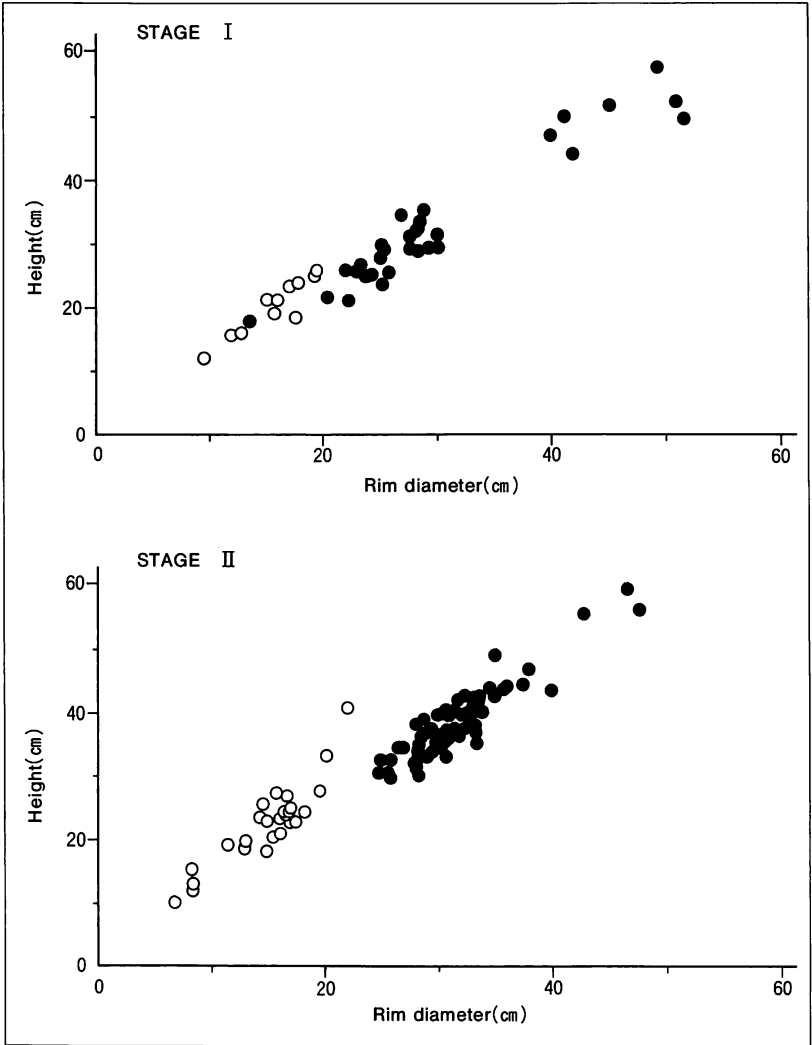


Fig. 2 Stage I and II Yayoi and Mumun pottery.



**Fig. 3** Heights and rim diameters of Yayoi and Mumun pottery.

●, Yayoi pottery; ○, Mumun pottery.

### Ⅲ 分 析

#### Ⅲ-1 弥生土器と無文土器の差異

まず弥生土器と無文土器の法量について検討する。口径と器高の散布図 (Fig.3) は、ステージⅠについても、ステージⅡについても、弥生土器が大型で無文土器が小型の傾向があり、両者は法量において明確に分離可能であることが一見してわかる。また、弥生土器の甕もサイズに大小があり、無文土器の甕も同様である。両者の相対的な大小関係は通時的に保持されている。

このような口径と器高との関係において、弥生土器と無文土器との間に明確な差異を見いだすことができたが、胴部最大径やその位置などとの多次元的な関係についてとみると、このような単純な方法では十分ではない。そこで、多変量解析の中でも主成分分析 (PCA) を用いて関係を把握することにする。計測点は、弥生土器と無文土器とに共通する 8 項目である (Fig.4)。資料は量的に十分なステージⅡのものを用いる。

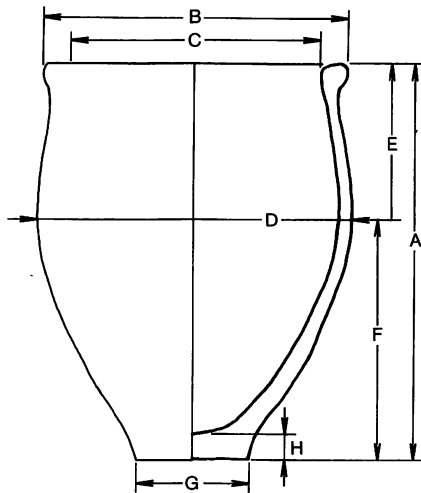


Fig. 4 The eight measurement points for principal component analysis.



**Tab. 1** Resultant eigenvalues, proportions and cumulative proportions from the principal component analysis

	Principal component				
	1	2	3	4	5
Eigenvalue	5.649	1.190	0.657	0.437	0.047
Proportion	0.706	0.149	0.082	0.055	0.006
Cum. prop.	0.706	0.855	0.937	0.992	0.998

**Tab. 2** Factor loadings from the principal component analysis

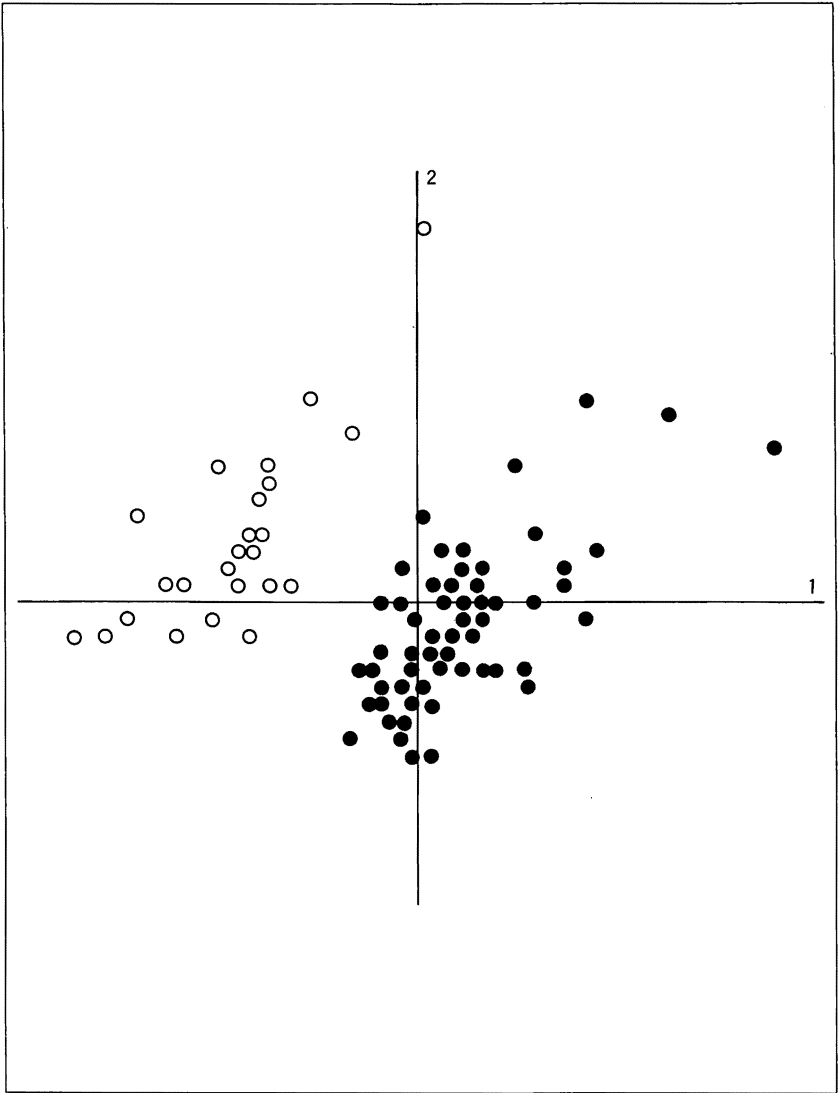
Variables	Principal component		
	1	2	3
A	0.981	0.041	-0.123
B	0.970	-0.181	-0.129
C	0.974	-0.177	-0.085
D	0.987	-0.059	-0.052
E	0.330	0.873	0.342
F	0.964	-0.173	-0.152
G	0.634	0.549	0.064
H	0.618	-0.167	0.766

その結果 (Tab. 1・2)、ステージⅡにおいては、第1主成分はいずれの変量においても正の値が出ており、胴部最大径を除けばほぼ同程度の値である。このことから、多少の形態変化はあるもののおおまかにみてサイズファクター (大きさの因子) に関するものと考えてよい。これが寄与率約71%とかなり大きく寄与しており、このデータ構造の最大の特質はサイズの大小にあることを示している。第2主成分以下は相対的に小さな寄与率であるが、経験的判断から、第2主成分までは明らかに意味のあるものと考えられる。第2主成分はシェイプファクター (形態の因子) であるとみられ、ここまでで約85%を説明している。第2主成分では口縁部から胴部最大径までの距離と底径において突出した値であり、非常に大まかにいえば、全体として低位に重心があるどっしりした器形を呈するか高位に重心がある頭でっちな器形を呈するかという方向の差異を示している。

第1・第2主成分のスコアを2次元散布図にプロットしてみると (Fig.5)、散布図において、弥生土器と無文土器はそれぞれ直線的に分布しており、相互にはっきりと区別される。主としてサイズをあらわすとみられる第1主成分はX軸方向であるが、この軸に沿って弥生土器と無文土器の分布は大きく振れており、両者は全体的なサイズでも差があるということがわかる。

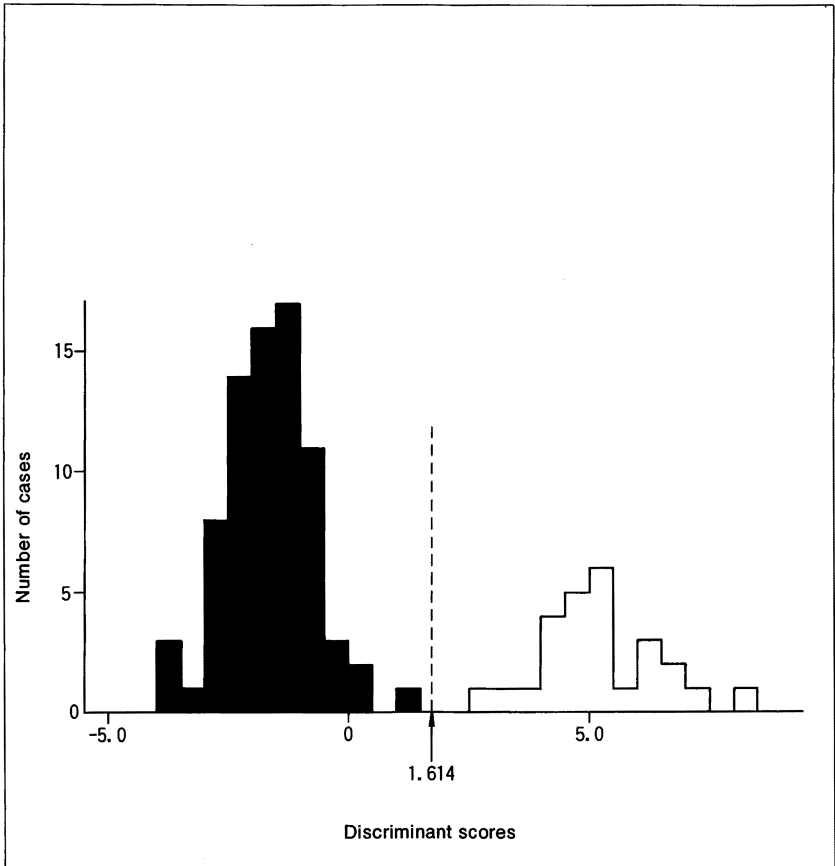
次に、同じ計測点を用いて弥生土器と無文土器との間で判別分析を行う。なお、分析にあたって、折衷の疑いがないものを無作為に抽出したものを資料としている (Fig.6)。その結果、やはり弥生土器は弥生土器の領域に、無文土器は無文土器の領域にきちんと振り分けられており、誤判別はなく100%の判別効率があった。両者は計測的属性においては区別できることが裏付けられた。

つぎに、非計測的な属性について検討する。弥生土器と無文土器の差異は、一見してわかるように口縁部の断面形態に顕著である。その他に、これまでほとんど述べられることはなかったが、筆者が重視したいのは口縁部の平面形態である。

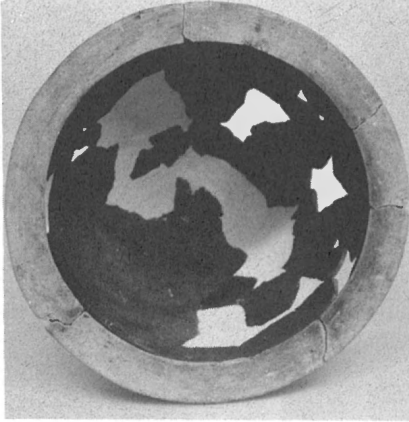


**Fig. 5** Two-dimensional scatter diagram of Yayoi and Mumun pottery by principal component analysis.

X-axis, PC1; Y-axis, PC2; ●, Yayoi pottery; ○, Mumun pottery.

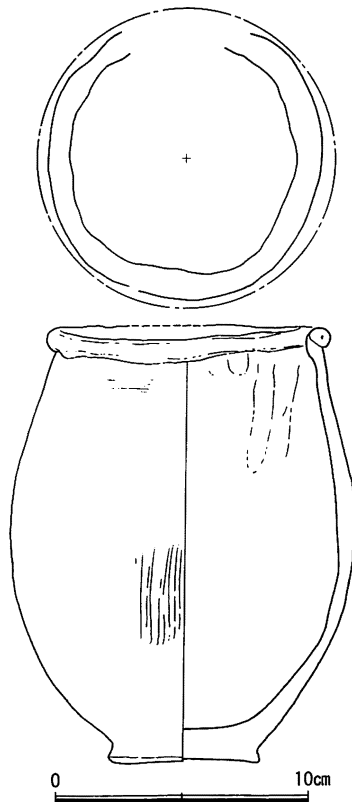


**Fig. 6** Histogram of discriminant scores.  
 ■, Yayoi pottery; □, Mumun pottery.

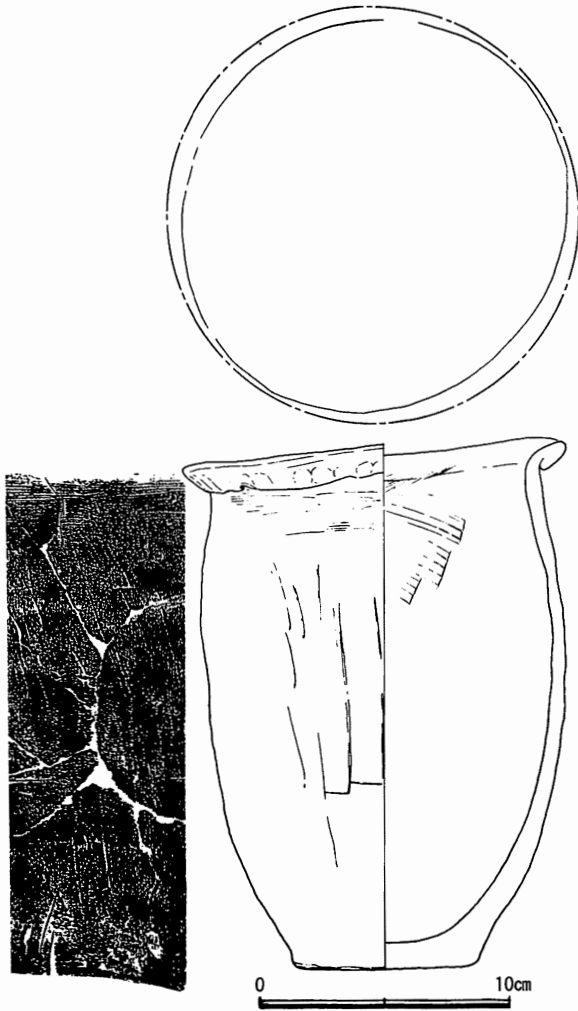


Pl. 1 A, Yayoi pottery; B, Mumun pottery.

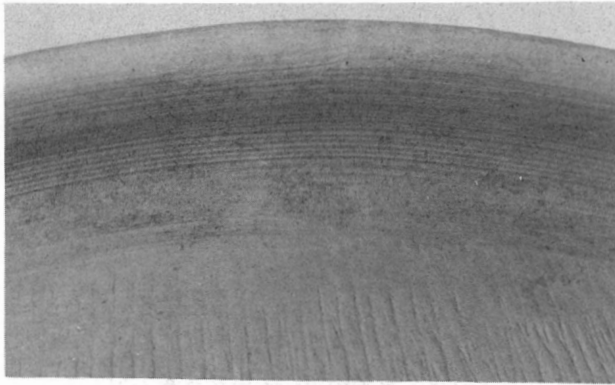
北部九州の弥生土器の口縁部平面形態はひずみが小さくほぼ正円を呈する (Pl.1-A)。布か皮のようなものによるヨコナデの痕跡が明瞭で、ふつう継ぎ目が少なく、ヨコナデの方向は一方向である。このことから筆者は回転台が使用された可能性が強いと考えている。一方、無文土器の場合は、口縁部外面の連続指頭圧痕が明瞭なものが多く、これをナデ消すことは基本的にない。また、ひずみのある不整円形を呈する傾向が顕著である (Pl.1-B)。この点は弥生土器と無文土器とを区別する大きな指標となりえる (Fig.7・Fig.8)。



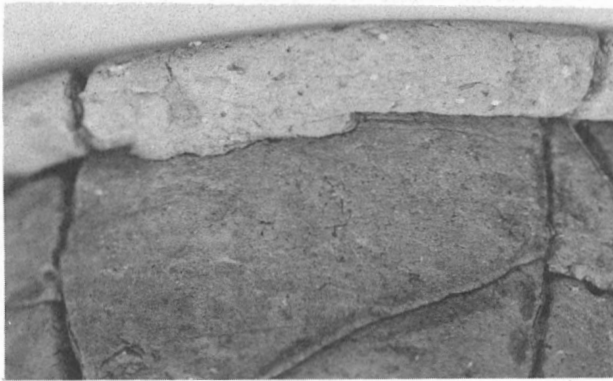
**Fig. 7** An example Mumun pottery from Nuk-do site (stage I).  
The brokenline represents an absolute circle.



**Fig. 8** An example Mumun pottery from Nuk-do site (stage II).



A



B

**Pl. 2** Surface finishing under the rim in stage II.  
A, Yayoi pottery; B, Mumun pottery.



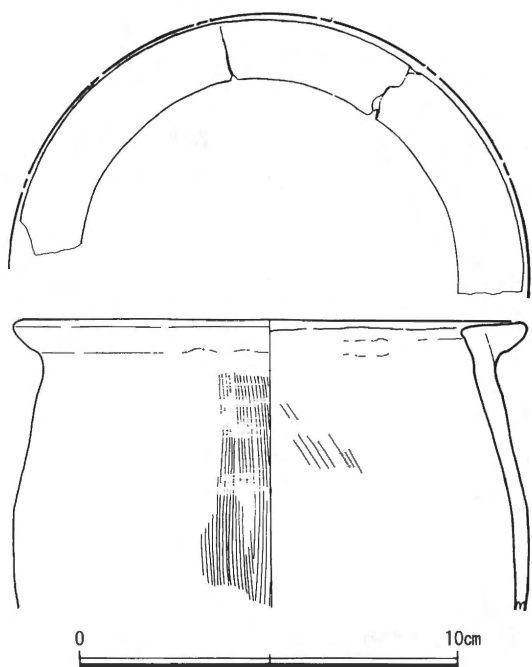
また、弥生土器は口縁部下端の付け根部にもヨコナデの痕跡が明瞭なものがほとんどである (Pl.2-A)。そのため、指頭圧痕や粘土紐の接合痕が残ることはまれである。それに対し、無文土器では口縁部の粘土紐接合痕をナデ消すことはなく、口縁部の一部を指でナデつけることによって接着をはかっているものが多くある (Pl.2-B)。

ハケメあるいはハケメ状の調整は両者に共通してはいるが、弥生土器の外表面調整がほぼ縦方向に方向のそろった長いハケメであるのに対して、無文土器のほうは斜め方向のものも多く、原体も弥生土器と異なったものが見られる。こうしたハケメ類似の調整手法が両者の間で共通していることは注目しなければならない。また両者にはタタキ技法が見られることも共通している。その多くはハケメ原体そのものか細い板状のものであり、その点でも共通している。

弥生土器と無文土器とを比較すると、輪切りにした場合、弥生土器は正円に近く、器壁の厚みの変動が少ないが、無文土器は歪みがあり、厚みの変動が大きい。甕どうしを比較すれば、平均の差において弥生土器の方が薄いという傾向が明らかにある。口縁部の接合技法は、胴部からいっきに上まで同じ厚さで作成し、外側に粘土紐を張り付け口縁部を成形するというものである。この技法はどちらにも用いられているものであるが、無文土器の場合は、やや外側に口縁部に巻き込んだものが多いのに比べ、弥生土器の場合そのようなことはなく直線的である。底部から胴部への立ち上がりについても無文土器が外膨らみであるのに対して、弥生土器はくびれている。

### Ⅲ-2 「折衷土器」

朝鮮半島南部の三千浦市勸島遺跡で出土した弥生土器は、ステージⅡに属するものである。つまり、城ノ越式は確認できず、若干須玖Ⅰ式の古い段階を含んでいる可能性があるが、主体は明らかに須玖Ⅰ式である。弥生土器と報告されているもののうち、胎土などからみて搬入品とみられるものを除き、「折衷土器」である可能性のあるものをとりあげる。なお、弥生土器的な要素をもつ土器は、在地的な無文土器に比べて著しく少ないものである。



**Fig. 9** Example A (scale  $\frac{1}{2}$ ).



**Pl. 3** Example A.

現在発表されている資料の中から抽出した、代表的な折衷の事例を以下に述べる。

### 事例 A

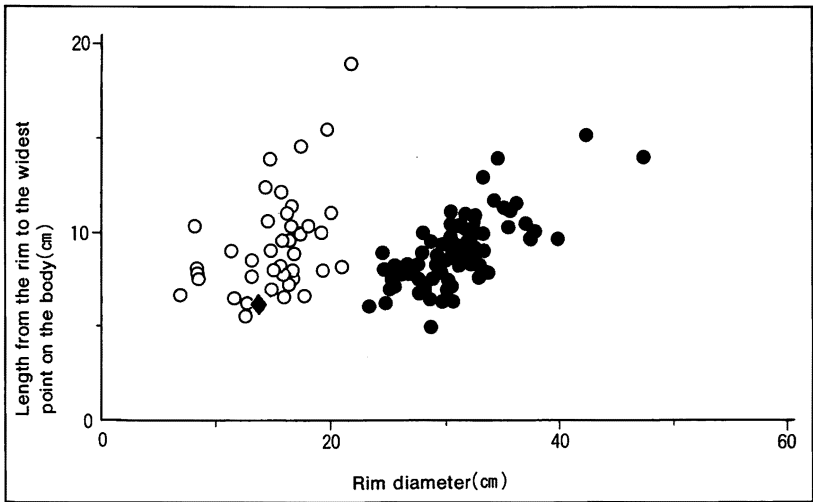
最初の例は、靛島遺跡Ⅱ地区出土の甕形土器である (Fig.9・Pl.3)。この個体は弥生土器として報告されている [徐, 1990; 安・徐, 1990]。その時期については、口縁部が須玖Ⅰ式には小さめであることから、須玖Ⅰ式より前の城ノ越式とみる意見もあるようであるが、諸属性において城ノ越式よりも須玖Ⅰ式の特徴を具有している。

この個体の弥生土器的な要素をあげると次のとおりである：

- 1) 器壁は非常に薄い。
- 2) 口縁部断面の接合線は部分的にしか観察できないが、少なくとも外側に巻き込んだものではないようである。
- 3) 口縁部の平面形態は明らかに正円の円弧に近く、厚みの変動が少なく一定している。
- 4) 胴部の横断面も同様である。
- 5) 調整法は、外面は縦方向の整ったハケメで、口縁部および胴部上位ははっきりとしたヨコナデで条線は円に沿っている。胴部のハケメはとくに上半部がヨコナデで消えている。回転によるヨコナデと見られる。
- 6) 口縁部下面はわずかに指頭圧痕が確認できるがその上からきれいにヨコナデがなされており、胴部から口縁部への移行がなだらかで、接合線は見えない。
- 7) 口縁部が逆L字形を呈する。もちろんその形状は無文土器には全く見られないものである。

以上、弥生土器的要素とみられるものを抽象化すると、口縁部の形態と、とくに技法に関する部分であるということが出来る。

次に、この個体にみられる弥生土器的ではない要素をあげる：



**Fig. 10** The position of example when analysed against the heights and rim diameters of Yayoi and Mumun pottery.

◆, example A; ●, Yayoi pottery; ○, Mumun pottery.

- 1) 口縁部の張り出し方については、弥生土器としてやや短めである。
- 2) 弥生土器としては小型で、しかもサイズは明らかに無文土器の領域に一致する (Fig.10)。
- 3) 全体的なプロポーションは破片資料のため不明であるが、胴部が大きく張っている点はむしろ無文土器的である。

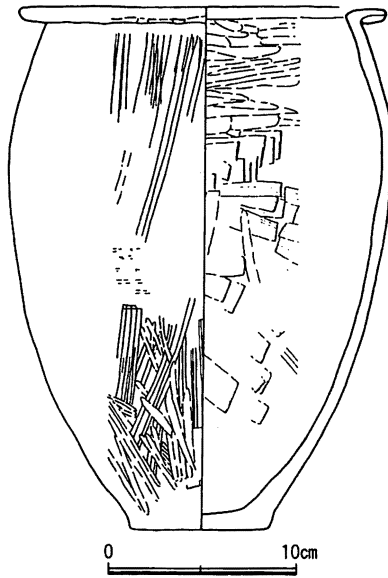
これらは、弥生土器的ではない要素というよりむしろ無文土器的な要素といえよう。それを抽象化すれば、とくにサイズとプロポーションに関する部分において無文土器的であるといえる。

以上から、この個体は弥生土器的な要素と無文土器的な要素との両者を合わせもったものといえる。

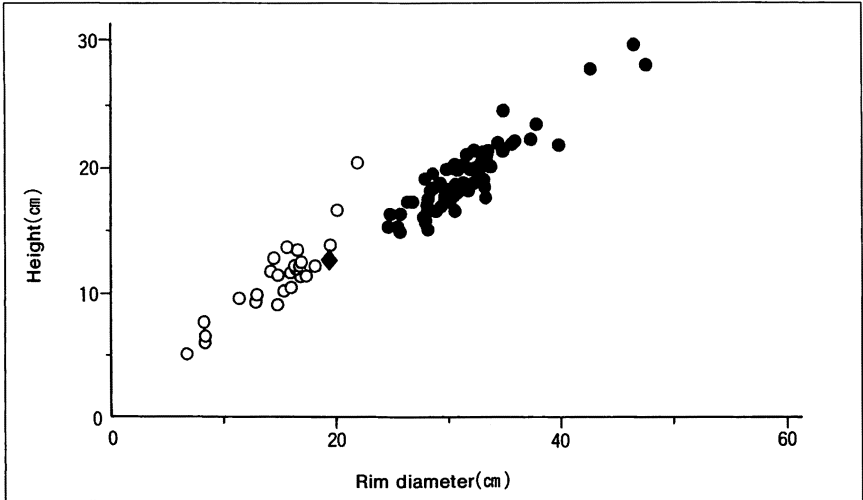
### 事例 B

次の例は、同じ勒島出土土器でも別のパターンをもつとみられるものである (Fig.11)。この個体の特徴を次に述べる：

- 1) 口縁部の技法は粘土帯を巻き込んで作るもので、無文土器に特徴的な製作技法である。



**Fig. 11** Example B (scale  $\frac{1}{4}$ ). Source : Pusan National Univ. Museum (1989).



**Fig. 12** The position of example B when analysed against the heights and rim diameters of Yayoi and Mumun pottery.

◆, example B; ●, Yayoi pottery; ○, Mumun pottery

- 2) 底部から胴部への立ち上がりが外膨らみである。
- 3) サイズは明らかに無文土器と同じである (Fig.12)。
- 4) その他、調整法の特徴は明らかに無文土器のものである。

以上のように、この個体は無文土器的要素を多くもっているのであるが、次の2つの点において弥生土器的である：

- 5) 口縁部が逆L字形に折れ、長く外にのびている。
- 6) 胴部最大径が上位にある。

こうした点は在地の無文土器に比べて特異なもので、弥生土器的要素と考える。諸特徴をまとめれば、調整法などの技法と胴部下位の形態、サイズは無文土器的であり、口縁部の大まかな形態や胴部下位を除くプロポーションが弥生土器的であるといえる。

#### 事例C

なお、勒島で出土した「弥生土器」のうち胎土などからみて明かな搬入品とみられるものを除けば、形態・技法ともに弥生土器と判断できるものでも、通常の弥生土器としては口径が小さめであることは注目できる。ただし、無文土器ほど小さくはない。これは釜山市萊城遺跡出土の「弥生土器」においても認められる。いずれも破片資料であり、また搬入品の可能性も捨てきれないため確実なことはいえないが、おそらくは全体的なサイズが小さめであるようである。こうした例については折衷とはいえないかもしれないが、注意しておきたい。

## IV 考 察

### IV-1 土器づくりにおける意識しない身体の動きと実践的な知識

土器づくりにあたっては、一連の複雑な工程があり、それにまつわるさまざまな知識を含めて習得されていなければならない。そうした土器づくりにおいて、製作過程のあらゆる局面ごとに、この道具の持ち方はどうで使い方はどうだったかとか、次は何をすればよかったのか、などといちいち考えはしない。土器づくりを習得することは、こうしたあらゆることを一連の過程として習得

するということなのである。その結果、通常、意識しない身体の動きと、実践的な知識に基づいた行為として土器づくりは行われるようになる。

このうちの意識しない身体の動きという点については、モーターハビット motor-habit という概念が想起される。これは、特定の筋肉運動と結びついて文化的にパターン化されたものであり、ふつう意識することなく用いる活動のパターンである。この概念を考古学的に使用した例として、D. Arnold の研究がある [Arnold, 1985 ; 1989]。モーターハビットのパターンは長い年月をかけて反復経験することにより習得されるものであり、習得は容易ではない。通常意識されることもなく、また変化もしにくい。

もっとも、土器づくりはたんなる筋肉運動の構成ではない。そのような筋肉運動は製作者の実践的意識下において統合されている。実践的な知識という点については、言説的ではないが無意識ではない意識 [Giddens, 1979] と位置づけることができる。要するに、日常生活の場面においてはとくに意識することなく行っているが、新たな事態に対処する際には明確に意識される部分もあると思われる。

この両者を包括する概念として、P. Bourdieu によるハビトゥス habitus という概念がある。それは一定の社会的カテゴリー内部において、個人が経験を通じて後天的に獲得するものであり、持続的な性向の体系である。これにより人はさまざまな実践を生み出すのである。この概念は、ある種の価値観や好み、態度や身のこなしなどまで含んでいる [e.g. Bourdieu, 1980]。

ここで整理しておけば、土器づくりは社会における一連の行為のうち、通常は特に個々のプロセスを意識の上へのぼらせることなしに行われるものであるが、しかしその製作者が異なった環境に身をおいた場合に、製作者の意図によってあるいは無意識のうちに容易に変化させうる側面があり、一方でモーターハビットや、属性の物理的特性による認知のされにくさなどによって容易には変化させにくい側面があるということが出来る。このように考えるならば、土器の属性について、容易には変化させにくいものはどれであるかがわかると、製作者が本来、無文土器と弥生土器のどちらの製作を習得した人物であったのか

を知ることができるのである。

それを基礎として、「折衷土器」製作のより具体的なプロセスにアプローチすることができる。

実際の方法としては、土器のもつさまざまな属性について、模倣の容易さ、すなわち上に述べたモーターハビットとの関わりやその属性に関する情報の伝達のされやすさなどという視点から評価を行い、それに基づいて、それぞれの土器製作者間のインターアクションの性格やそれぞれに固有の認識のしかたについて論究するということになる。すなわち、ここであげた事例でいえば、器面調整のしかたや、器壁の厚さの変動やゆがみなどの、いわば技法的な側面から説明されるような諸属性は、道具の使い方や、手の動かし方や姿勢などのモーターハビットと深く関わるものと考えられる。それに対して、サイズや、全体的なプロポーション、口縁部の大まかな形態といったいわば形態的な諸属性は、視覚的情報として伝達が容易であり、それを模倣しようとする意志さえあれば、作り方に深く習熟していなくても、あるいはほとんど知らない場合でも、ある程度模倣することは可能である。また、変異のあり方によっては、無意識的な変化である可能性も考えられよう。なお、口縁部の接合法については属性の物理的特性による認知のされにくさと関わっているとみられる。

## Ⅳ-2 靛島における「折衷土器」の解釈

上での「折衷」の事例はどのように解釈することができるのであろうか。事例A・Bともに、技法的な面と形態的な面とで完全とはいわないけれども異なった対応がなされているといえる。このうち技法的な面は、上で述べたようにモーターハビットや実践的知識と結びついたものとみることができる。形態的な面のうち、あるものは意図的なものである可能性が高い。もっとも、この技法的／形態的という二分法は純粹に分析的なものであり、実際には両者は互いに深く結びついており分ちがたいものである。また、形態的な情報自体はすべて伝達可能であるとしても、すべてが意識的に認知されるわけではない。その中のいくつかの要素のみが認知され、さらにその中のいくつかのみが模倣



されるということになるのである。

事例Aの場合、器壁が薄く、横断面が整った正円であり、回転台を駆使した製作技法が想定できる。また口縁部接合法からみてもまさしく弥生土器的であり、こうした技法的な面は全て弥生土器的である。このことから、この土器製作者は弥生土器製作のモーターハビットを習得していた人物であったといえる。ところが、サイズは無文土器と同じで胴部の張りなども無文土器的である。これらは無文土器のもつ視覚的な特徴であり、無文土器の製作技法についての知識がなくても十分模倣は可能であるとみられる。以上から、この個体の製作者は、弥生土器製作を日常的に行っている社会においてある一定の長い期間にわたって土器の製作をマスターした人物であり、その人物が無文土器を「模倣」したと判断できる。この「模倣」の性格については後で述べる。

事例Bの場合、口縁部の接合技法や調整法などの技法的側面においてまさしく無文土器的であり、一方、視覚的にも伝達されやすいとみられる口縁部の大まかな形態や胴部上半のプロポーシオンにおいて弥生土器的である。このことから、この土器製作者は無文土器製作のモーターハビットを習得していた人物であったといえる。なお、胴部下位の形態、サイズは無文土器的であった。なぜ胴部下位が「模倣」されなかったかということについては、弥生土器においても無文土器においても胴部上半により情報が集約していることを勘案すれば理解できよう。サイズについては、無文土器を使用するライフスタイルとの関係を考慮する必要があるだろう。そうすると、完全な弥生土器のイミテーションが目的ではなく、むしろ無文土器社会において日常的に使用する土器の製作というコンテキストにおいて、不都合でない程度のなにかの「模倣」が行われたとみることができる。このように考えると、事例Aの場合もサイズにおいては無文土器と同じであり、無文土器社会での使用が前提とされて製作された可能性が考えられる。実際にこの個体には煮炊きに使用した痕跡が認められる。

以上2つの事例から明らかなように、ひとくちに「模倣」といっても様相は一様ではない。

次に事例Cを検討する。ほとんど弥生土器といってよいものであるが、サイ

ズがわずかに小さいだけである。これは弥生土器製作者のもつ「弥生土器」についてのプロトタイプが、弥生土器よりもむしろ無文土器を頻繁に目にするようになることによって若干修正を受けたものと理解できる。いわば「プロトタイプのゆらぎモデル」である。しかし、このモデルについては、すでに記したようにいずれも破片資料であり搬入品の可能性も捨てきれないので、モデルとしての提示にとどめ、以下では事例A・Bについて考察する。

それでは、事例AとBの「模倣」の仕方によってどのような解釈ができるのであろうか。共通点に着目すると、ここでの「模倣」は一見してわかる表層的な部分で行われており、基本的な技術の変化はしていない。このような「折衷土器」の数の少なさからいっても、「模倣」がごく表層的な面にとどまっていることからみても、意図的であったとしても、模倣せざるをえなかった緊迫した社会状況などは想定しがたい。ここで扱った事例は、どの場合も意図的に差異を強調したりはしていないことはたしかであり、友好的関係にあったことが想像される。さらに、この2つの事例の製作者個人についてはその個体を製作した時点において土器づくりの技術が伝達されるような接触のしかたではないこともわかる（その人がその後どうなったかは知らないが）。

無文土器製作者は主な形態を、弥生土器製作者はサイズとプロポーションを変えて「折衷」している。このような「折衷」にあたっての対処のしかたの違いは何に起因するのであろうか。まずサイズについては、弥生土器製作者側のみが「模倣」しておりその逆はない。その理由としてまず考えられるのは、無文土器の製作者あるいは使用者が靛島において圧倒的多数を占めるものであり、弥生土器の製作技法をマスターした人物はマイノリティーであったという社会状況である。マイノリティーである弥生土器製作者が無文土器社会のライフスタイルに適合させるべく積極的にサイズを「模倣」したものと考えられる。

次に口縁部であるが、なぜ技法的には弥生土器的で口縁部形態のみ無文土器の粘土帯をつけたものなどは見られないのであろうか？このことを説明することはむずかしい。弥生土器は、回転台を使った正円のひずみの少ない平面形で、なめらかな胴部であり、ハケメは垂直方向に丁寧に施されている。またそうし

た変異の幅が狭く規格化の程度が高い。一方、無文土器はひずみが大きく厚さも不安定であり、調整具および調整のしかたに変異が多く、調整具の運動にスピーディーな勢いが見られる。これらは一連の土器づくりに見られる性向の違いととらえることができるが、それぞれの土器製作者のハビトゥスの一環を形成するものであり、文化の他の側面においても類似した性向として現れている可能性が強い。そもそも少なくとも、弥生土器製作者と無文土器製作者によって土器の大きさや形態などの物理的なものだけではなく、土器に関わる象徴的な意味合いも違うものと考えられる。また、土器は、文化資本のうち客体化されたもの [Bourdieu,1979] である。それぞれにおいて土器にかかわる文化資本——土器という客体化された形態と一連の土器づくりという身体化された状態——の位置づけが異なる。自分達の文化に属さない——自分達が再生産してこなかった——文化資本に出会ったときの対処のしかたの違いが、「性向の体系」であるハビトゥスの違いとして理解できるのである。そのようなハビトゥスの違いが弥生土器製作者と無文土器製作者の対処の違いをうみだしたと考えられるのである。

土器は他の土器と転換可能な諸属性から構成されているものであるにすぎない。しかし、要素が伝達されたとしても、それが模倣されるかされないかについては、ハビトゥスにもとづいて好ましいか好ましくないかが意図的／無意識的に判断され、決定されるのである。その評価は属性によっても異なるであろうことから、冒頭にあげたような属性による動態の違いというものが説明できるのである。

すると、勒島出土土器においては、口縁部に代表される形態的な模倣は、無文土器製作者のほうが行っている。ということは、勒島の無文土器社会のハビトゥスにおいてその特徴が少なくともマイナスの評価を与えられるものではなかったこと、および土器に関わる文化資本はそれほど高い象徴的意味をもつものではなく非常にゆるやかな規範をもつものであったことを示唆している。

## V おわりに

はじめのほうで述べたように、

型式の伝播／属性の伝播；人の移動／情報の伝達

などという図式を提示するところでとどまっているだけでは、錯綜した地理的変異が具体的にどのようなプロセスによって生み出されているのかという問題の本質的な解決にはならない。本論では、従来、抽象的でしかも記述的なレベルで議論がなされてきた問題に対して、モーターハビットやハビトゥスなどの概念を使用することによって、個人とその属する文化や社会といったものとの関わり方を行為者のレベルに焦点を当てて、より実態に即した形で説明することに一定の貢献をしたと考える。

本論での試みはさまざまな意味で、限られた対象で行ったものであり不十分なものではあるが、従来の考古学的議論の枠を多少とも広げるものとなれば幸いである。

## 謝 辞

本論は1992年7月に行われた「第6回九州－釜山考古学合同研究会」で発表した内容をもとにまとめたものである。この研究は、数年間にわたるこの研究会での韓国研究者との交流なしにはなしえなかったであろう。資料収集にあたり、釜山大学校ならびに釜山大学校博物館、釜山直轄市立博物館、小郡市埋蔵文化財調査センターの協力を得た。また、下記の方々には資料収集時や研究会での席上で多くのご教示・ご協力を得た。末尾ながら記して感謝いたします。安在皓、大西智和、岡村秀典、片岡宏二、金貞姫、徐始男、孫允花、田中良之、土井基司、中島達也、中山清隆、西谷正、河仁秀、L. J. Hodgkinson、松本直子、溝口孝司

本論は、平成4年度文部省科学研究費補助金（一般研究C 研究課題番号04610247）の成果の一部である。

## 文 献

Arnold, D., 1985 : *Ceramic Theory and Cultural Process*. Cambridge University Press, Cambridge.

———, 1989 : Patterns of learning, residence and descent among potters in Ticul, Yucatan, Mexico. *Archaeological Approaches to Cultural Identity*. Unwin Hyman, London.

Bourdieu, P., 1979 : *La Distinction*, Ed Minuit (石井洋二郎訳, 1990 : デイスタクシオン, I・II. 藤原書店, 東京).

———, 1980 : *Le Sence Pratique* (今村仁司・港道隆訳, 1988 : 実践感覚 1. みすず書房, 東京).

安在皓・徐始男, 1990 : 勒島住居址遺物 追報. 伽倻通信, 19・20. pp. 71-105.

深澤芳樹, 1986 : 弥生時代の近畿. 岩波講座日本考古学, 5. 岩波書店, 東京.

Giddens, A., 1979 : *Central Problems in Social Theory*. London :

Macmillan ; Barkeley and Los Angeles : University of Carifornia Press (友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳, 1989 : 社会理論の最前線. ハーベスト社, 田無).

羽生淳子, 1986 : 縄文土器の類似度. 史学, 55(2・3). pp.115-144.

溝口孝司, 1987 : 土器における地域色. 古文化談叢, 17. pp.137-158.

中島達也, 1985 : 横隈鍋倉遺跡. 小郡市文化財調査報告書, 26. 小郡市教育委員会, 小郡.

片岡宏二, 1988 : 三国の鼻遺跡Ⅲ. 小郡市文化財調査報告書, 43. 小郡市教育委員会, 小郡.

釜山大学博物館, 1989 : 勒島住居址. 釜山大学校博物館遺蹟調査報告, 13. 釜山大学校博物館, 釜山.

佐賀県教育委員会, 1973 : 土生・久蘇遺跡. 佐賀県文化財調査報告書, 25. 佐賀県教育委員会, 佐賀.

———, 1977 : 佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告集第2部 土生遺跡. 佐賀県文化財調査報告書, 37. 佐賀県教育委員会, 佐賀.

- 徐妗男, 1990: 靛島遺跡Ⅱ地区Ⅴ層出土土器. 考古研究, 5. pp.3-13.
- 宋桂鉉・河仁秀, 1990: 東萊福泉洞萊城遺蹟. 釜山直轄市立博物館遺蹟調查報告書, 5. 釜山直轄市立博物館, 釜山.
- 田中良之, 1982: 磨消縄文土器伝播のプロセス. 森貞次郎博士古稀記念古文化論集, 上. 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, 福岡. pp.59-96.
- 田中・松永幸男, 1984: 広域土器分布圏の諸相. 古文化談叢, 14. pp.81-117.
- 都出比呂志, 1983: 弥生土器における地域色の性格. 信濃, 35(4), pp.245-257.
- , 1989: 日本農耕社会の成立過程. 岩波書店, 東京.
- 常松幹雄・古川千賀子, 1992: 第31次調査報告. 那珂6. 福岡市埋蔵文化財調査報告書, 292. 福岡市教育委員会, 福岡.
- 上野佳也, 1980: 情報の流れとしての縄文土器型式の伝播. 民族学研究, 44(4). pp.335-365.
- 山本典幸, 1991: 縄文土器の類似性とコミュニケーションシステム. 國學院大學考古学資料館紀要, 7. pp.65-80.

### (補記)

脱稿後、次の論文を知った：林謙作は土器の諸要素を、「じかに目に見える要素 overt elements」で「みようみまねのできる要素」と、「みようみまねの利かぬ、じかに目にはみえない要素 covert element」に分け、後者を「奥儀秘伝の伝授」ともいうべき伝達方式と関連づけて解釈を行っている。本論での注目点と深く関係することであり、基本的に賛同できる。

林謙作, 1990: 素山上層式の再検討, M・Y・Iの主題による変奏曲. 伊藤信雄先生追悼 考古学古代史論攷. 今野印刷, 仙台.